

年齢と成長に応じて「子育てのギアチェンジ」を

1 0歳～6歳頃（愛情期）の子どもとの接し方

子育てにおける最初のステージは、0歳～6歳ごろの「愛情期」です。この時期の課題は、子どもの心の土台、つまり自己肯定感を育てることです。お子さんが将来、困難を乗り越えて頑張っていけるかどうかは、基本的な自己肯定感が育まれているかどうかにかかっています。自己肯定感が育まれていれば、これからの人生の厳しさに直面したときに、心がボキッと折れてしまうのを防ぐことができます。

最近、子育てにおける重要な要素として注目されているものに「レジリエンス」があります。レジリエンスとは、くじけそうなことや困難なことに直面しても、そこから立ち直り、もうひと頑張りできる力のことです。人生の大事な場面では、ふんばる力、立ち直る力があるかどうかで大きく道が分かれます。レジリエンスを育てることは、みなさんがお子さんに与えられる「人生最大のプレゼント」です。そのためには、「何があっても大丈夫だよ」「私はあなたの味方だよ」「何があっても受け入れるよ」という思いを、何度でもくり返し伝えていきましょう。

2 6歳～10歳頃（しつけ期）の子どもとの接し方

子育てにおける第2のステージは、6歳から10歳くらいの時期です。いわゆる「思春期」に入る前の段階までと考えていましょう。この時期は、いわば「しつけ期」にあたります。社会的なルールを学び、他者とのかかわりや、集団の中で行動する力を身に付けていきます。

6歳までの「愛情期＝心の土台づくり期」では、厳しいしつけよりも愛情を注ぐことが大切でした。しかし、6歳以降の子育てにおいてはしつけが重要になってきます。しつけや集団への参加によって、社会的なルールや道徳を習得していく時期です。社会的なルールを守りながら、みんなと協力して何かをするのは楽しいんだということを学ばせていくのです。大切なのは、子どもが集団の中に身をおき、「自分はみんなの役に立ってるんだ」と実感できることです。この共同体感覚は、お子さんが大人になり、社会で働くうえでも大変重要になります。みなさんは、お子さんが大人になったときに、社会の中で生き生きと活躍してほしいと願っていることでしょうか。そうなるためには、6歳から10歳くらいのこの時期に、共同体感覚を育てることが大切です。

3 10歳～18歳頃（見守り期）の子どもとの接し方

子育てにおける第3のステージは、子どもがみなさんとは別の「自分」をつくっていくのを支える時期ー「見守り期」です。

この時期の子どもは、素直にみなさんの期待に応えてくれていた小学3年生頃までとは異なり、みなさんから心理的に離れていきます。これは、自分づくりという課題に向かうためです。いわゆる「思春期」に入ります。その結果、お子さんが理由もなく反抗しているように見えることがあります。

「自分づくり期」のはじまりは、早い子で9～10歳、遅い子は16～17歳です。個人差が大きいので、みなさんは自分のお子さんが今、どの時期にいるのかをしっかりと見定める必要があります。この時期はお子さん自身にとって、ものすごく難しい時期です。

大切なのは、「しつけ期」から「見守り期」へみなさんがギアチェンジをすることです。ギアチェンジをうまくするための最大のポイントは、過干渉しないことです。普段は見守り、ピンチのときには支える。これが、この時期の子育ての基本的な姿勢です。これまでの「しつけ期」と同じように過干渉をしたり、ガミガミとどなったりすると失敗します。みなさんとは違う自分づくりという課題に取り組んでいるときに「あなたはまだ子どもなんだから、自分なんてたなくていい」というメッセージを受け取ったら、子どもは、自分づくりが台無しになってしまうという不安にかられます。

（大田区教育委員会発行『子育ての3つのヒント』（監修 諸富祥彦）より抜粋）

